

生まれかわって来た子の話（再生譚）

奈良県立大学客員教授の岡本氏

火曜午餐会・3月第1例会は5日12時15分から当部5階大会議室で開催した。講師に奈良県立大学・客員教授の岡本彰夫氏を招き「生まれかわって来た子の話（再生譚）」をテーマに語って頂いた。岡本氏は「神や仏、目に見えない世界がある。人間も形は無くなるが、向こうの世界では生きている。ですから色々なことを報告すること。お供えもしてください。そうすればずっと繋がっていきます」と語った。講演要旨は次の通り。

国学という江戸時代に古事記や日本書記、万葉集などの文学を研究し、儒教・仏教が日本に影響を与える前の日本人固有の民族精神を明らかにしようとした学問のこと。

江戸時代後期の国学者に平田篤胤（あつたね）がおられた。少し変わったものの考え方をされる方で、自身も含めた近世後期を生きる当時の日本人にとって神のあるべき姿と魂の行方を模索された。しかし、神様はあまりにも尊い方なので人間風情が神様の研究や、論議してはいけな。これは奈良朝以来、連綿と日本人が持ち続けてきた。それほど神を敬えということ。

神社では祝詞を読み上げる。最初は必ず「かけまくもかしこき」から入る。口に出して言うことすら恐れ多いことですが、という意味。その次に神様のお名前を言うが、祀られている神様の名前ではなく、「春日さん」や「お伊勢さん」など、お祀りしている場所を言う。名前を言うことでさえ、もったいないということ。

『勝五郎再生記聞』

神様のことを調べても人間風情が分らず、平田篤胤は頭を打つことになる。そこで、人間は死んでも魂があるということの研究を始めた。

平田篤胤の代表作「勝五郎再生記聞」。亡くなり、生まれ変わる

までの6年間を、武蔵国多摩郡の農民勝五郎から聞き取り、研究、調査したもの。

文化2年、久兵衛としづとの間に生まれた藤蔵が、文化7年に6歳で亡くなった。この藤蔵の生まれ変わりとして、文化12年に源蔵とせいの間に生まれてきたのが勝五郎。

この勝五郎が、「藤蔵は疱瘡で亡くなり、自分の入棺の様子を横で見ている、埋葬に行くときには棺桶の上に座っていた。その後、家に帰り、母親や兄弟に声をかけるが振り向きもしない。ここで初めて自分は身体が無く魂だけになったと気付いた」。

勝五郎は、もと藤蔵であったとしか考えられないような事実を

次々と、生まれ変わった証拠を語った。

供養

お盆には家の門口に灯を焚いて、ご先祖様を迎える。しかし、最近はお盆に国内外へ旅行や遊びに行かれる方が多い。先祖さんが帰って来ておられるにもかかわらず、家には誰もいないことが多い。私も春日大社でお務めしている時、万灯籠で忙しく、先祖様のお世話が出来なかった。辞めてからはお盆の期間、朝昼晩ご給仕し穴埋めをさせてもらっている。

「供養」とは仏教用語だが、神道に置き換えれば「弔（とらう）」で、訪問するという意味。



先祖の供養は、亡くなった人を忘れず、いつまでも語ることが大事。盆に帰ってきて誰もいなければ、腹が立つでしょう。いつまでも忘れない。先祖の徳を称える。いつも一緒に生きていると思うことが大切なことです。

「運」

運の悪い人がいる。運は、勝手に回ってくるものではなく、自分で引っ張って来なければいけない。

聖武天皇の詔勅の冒頭に「人間が災いから逃れ、幸せになるには

幽冥による」とある。運というのは人間の力では如何にもし難い。つまり目に見えない世界のご加護を頂かなければ出来ない、と天皇は言っている。

幽冥とは、神、仏や祖先は嘘の通じない世界のこと。しかしこの世は嘘をつき放題。嘘がばれるかばれないか。人間と付き合うのも駆け引き。この世は全て損得だが、神や仏の世界では損得は通用しない。欲や得を抜きにして、目に見えない世界に真心を尽くすこと。決して代償を求めてはいけな。努力は必要です。これが通じれば「運」が出てくる。そして必

ずお陰というものもある。

様々な宗教があるが、常識で考えること。常識は天から授かったものであり、正しい道を歩むべき。神社仏閣が千年以上続くのは、間違いがないからです。

神や仏、目に見えない世界がある。これを恐れて生きれば素晴らしい生き方が出来る。人間も形は無くなるが、向こうの世界では生きている。必ず向こうに聞こえている。ですから色々なことを報告すること。お供えもしてください。そうすればずっと繋がっていきます。